教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
© 1988
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

自然保護と人権擁護

❖ ナチが社会の非生産分子という烙印を押して精神障害者を連れ去り殺し始めた時、人権擁護の闘士としてフォン・ガーレン司教が語った言葉は預言的であったと言えましょう。司教は当時ドイツで広がりつつあった考えについて述べたのです。

「〈生きる価値のない〉生命を殺すことは許される、換言すれば、罪のない人でも、国民や国家にもう役に立たないと思えば殺してもかまわない。罪のない人々を殺害するために使われ、病人や障害者、不治の病にかかっている人、もう働けなくなった老人……の殺害を認可するために使われた恐るべき信条。けれども、殺されたこの人々は、私たちの仲間であり兄弟姉妹なのです……皆さんには、私には、生産能力のある間だけしか生きる権利がないのですか？ 他の人人に生産的であると認めてもらえる間だけの……？ 汝、殺すなかれ！ この掟は、生と死を決定する権利をもつ唯一の神のものであり、創造のはじめから人間の心に刻みつけられたもの……私たちを創り、裁く唯一の神が下さったのがこの掟なのです！」(一九四一年八月三日のフォン・ガーレン司教の説教より抜粋)

❖ 左の言葉を決して歴史書や古文書館の中に死蔵しておいてはなりません。これは、尊厳と自由の中に社会を形成する権利を自分たちの手でもっている民主主義の国々においても非常に今日的な言葉です。今日、人間生命を脅かす強力な勢力が再び社会を襲ってきています。安楽死、表向きには人間的な思いやりを根拠に行なわれる殺人等が再び、驚くばかりにしばしば話題にされ、心得ちがいの新たな闘士が活躍しています。堕胎についても教会は黙って見過ごすわけにはいきません。堕胎や中絶はこの国や他の多くの国々でほとんど野放しになっています。勿論教会は司祭や信徒を通して、困難に陥っている妊娠した婦人には誰であれ同情を示し、可能な限り実際的な援助をしています。しかし、中絶に関する現在の状況についての卒直で偽りのない話合いが、タブーを伴う厄介な干渉としてはねつけられる時でさえ、教会は社会に向かって沈黙を守るわけにはいきません。

教会は、道義的責任（倫理・道徳の原理に対する責任を）、時にはキリスト教信仰から見て責任を感じる政治家や世論の指導者に援助を期待しています。妊娠と中絶にかかわる胎生学的、心理学的研究の数々の発見が、実際に則した個人的な決断に影響を与えるようになってほしいからであります。妊娠中絶法とその適用については、この法が生命を守るためというよりは、「むしろ堕胎はほとんどとるに足らぬ事であるとか、堕胎そのものは実は許されているとか、堕胎をしても罪の報いをうけないとかいう」心得ちがいの信念を広めてはいないかどうか、もう一度偏見を捨てて検討すべきです。

今、教会はまた、明確にかつ忍耐強く、すべての人の生きる権利を、特にまだ生まれる前の、それ故に特別な保護を必要とする者たちの生きる権利を、強力に弁護しなければなりません。無条件で、第五戒「汝、殺すなかれ」を擁護しなければなりません。この問題について熟考するのを拒むあらゆる美辞麗句や態度とは全く反対に、ほとんどの人は中絶が罪なき人間を殺害することであると感じているのは確かです。今日の倫理的価値感と判断とが矛盾していることに気づく人が大勢でてきたことはうれしい限りです。平和運動が、他の戦争反対に関するのと同じエネルギーでもって、生まれる前の生命を守る戦いをしないならば、それはもう平和運動の名に値いしません。生きる能力のある無数の子供たちが母親の胎内で虐待され殺されるのを無視するようでは、どんな環境保護運動もまじめには受けとれません。自由になった女性が、いくら自力で全てを決定すると言っても、その自由が彼女にまかせられていた人命、そして生死について自分で決断する権利をもっている人命を犠牲にして得たものであったならば、喜びを得るはずはありえません。私たちの誰もが守るに足る、あるいは社会の広い賛成を請うに値いする貴重な財産の中に、人命をも含めようではありませんか！ ソーシャルワーカーと医師、議員、ジャーナリストと教師は、良心的に、人命の法的擁護を求めて、公に呼びかけなければなりません。

(ドイツで、一九八七・五・一)

信仰と道徳に関する教会の責任

1

「あなたたちは地の塩である……あなたたちは世の光である。」(マテオ5・13〜14)

使徒たちに、そして今日私たちに向かって語られるキリストのこの御言葉を聞くと、神聖なる怖れに襲われます。すぐさまキリストに次のような言葉を返したくなるのです。御身こそが世の光で、すべてを保ち新しくする地の塩であられます、と。

御身こそ、地の塩、世の光です！ 私たちではありません。本日の典礼においても同様のことが述べられているようで、福音書に先立ってキリストの次の言葉が思い起こされます。

「私は世の光である。私に従う人は……命の光をもつであろう。」(ヨハネ8・12参照) また答唱詩篇には「正しい者の光としてやみの中に立ち、慈悲に富み、あわれみに富む正しい者」(詩篇112(111)・4)とあり、キリストを預言していることがわかります。

2

「御身……私たち」「御身と私たち」。

しかし本日の典礼は、この比較だけで終わっているのではありません。事実、キリストはそのようなことは言っておられません。御自身について「私は世の光である」と言われただけではなく、弟子たちに対して、

また私たちに向かって、「あなたたちは世の光である」と仰せになるのです。「あなたたちは私に従ってくる」から、私の中の光を受け入れるからこそ、世の光なのだ。私は「光となるためだけではなく、光を与えるために」この世にやって来たのだ。つまり、光を人の心に伝え、人の奥深くで輝くようにするためなのだ、と。

この事実にはっきりと気づいていたのは聖パウロで、人々の前でキリストの証人とならなければならない時の自分の状態、自分の弱さ、恐れについて、コリント人にあてて書いています。「私はあなたたちの中にあって、イエズス・キリスト、十字架につけられたイエズス・キリストのほかには何も知るまいと決心したからである。(…)あなたたちの信仰を人間の知恵ではなく神の力の上に基づかせるためであった」(コリント①2・2～5)と告白しています。

正しさについて

3 使徒パウロは、キリストの光、キリスト御自身である光をいかに受け入れ、他の人たちに伝えるかということを示してくれています。

「あなたたちは世の光である」と言われた時、キリストは私たちが光を伝えるよう、はっきりと望んでおられたのです。キリストは次のように付け加えられました。「山の上にある町は隠せぬ。また、灯をともせばますの下に入れず、燭台の上に置くものだ。こうすれば明かりは部屋じゅうの人を照らし出す。」(マテオ5・14～15)

ですから私たちには義務があるのです。受けた恵み、すなわち私たちが受け継いだ光に対して責任があるのです。自分だけのものとしておいてはなりません。〈私〉という壁の中に閉じこめておくわけにはゆかないのです。他の人々にも伝えなければなりません。〈光を与え〉なければなりません。〈人の前で〉光を輝かせなければならないのです。(マテオ5・16参照)

4 イザヤもまた、〈輝かせる〉ことの意味について説明しています。光が内にあれば、あなたの光は暁のようにさしのぼる(イザヤ58・8参照)、と書かれています。それは私たちのよき行ないを通して実現しますが、そのよき行ないによって主の善性が信者を満たし、外に向かって輝き出るのです。

預言者イザヤは、形式的ではなく内的な真実の礼拝を行なうにあたって、神が何を求めておられるのかを示しています。慈悲のわざを通して信仰を実現させることができてこそ、その信仰心は本物といえるのです。このように、イザヤ書の著者は正しい人の神に対する根本的な姿勢について述べています。そして神は、光と栄光の豊かな恵みを注がれるのです。

自らの功績をはるかに越えた報いを得て、真の信仰者はその充実した生き方、正しい意向、忍耐と心遣いによって他の人々の前に輝くのです。

5 イエズスも同じ教えを強調しておられます。「このようにあなたたちも人の前で光を輝かせよ。そうすれば、人はそのよい行ないを見て天にまします父をあがめるであろう。」(マテオ5・16)

このようにして、人の内なる光はキリストの行ない、福音、恩寵を通して、よき行ないの実践において現われるのです。私たちの信仰は信仰に基づいた行ないを要求しますが、愛にはぐくまれたものでなければ、その光も失せてしまいます。

それはまた同時に神への証しでもあります。よき行ないという土の上に花咲くすべてのよきことは、同時に世を豊かにし、神を称えることにもなります。

6 こうして〈光〉の比喩は〈塩〉に結びつくのです。

キリストの弟子として、私たちは地の塩とならなければなりません。塩は食物を腐敗から守ります。キリスト者に求められているのは、心と良心に健全さと新鮮さを与え、真に人間らしい、まっとうな生活をもたらすような価値を世の人々に確信させることなのです。

従って、〈光〉となることは〈地の塩〉となることであり、塩となることは同時に光となることでもあるのです。キリスト者の生活のこの二つの流れ、この二つの務め、キリストの秘義に与って手に入れる使命の、十字架と復活というこの二つの側面は、切り離すことができません。

こうして教会は、教導と司牧という使命においても、信仰と道徳の問題に関して特に責任を自覚しています。教会は信仰と道徳を守ります。この二つが私たちの贖いの遺産なのです。信仰と道徳によって私たちはキリストの知恵と力に与ることができるのです。

御子は祈りの中で御父と話される

1 イエズス・キリストは御父と一つに結ばれた御子、御父によって生きておられる(ヨハネ6・57参照)御子、地上での生涯を御父に捧げ尽くされた御子です。今まで述べてきたこのようなテーマは、イエズスの祈りのテーマと深く結びついています。特に御子が御父と一つに結ばれていること、御子が自らを御父に捧げられたこと、そして人間として御父に対する従順を全うされたこと、これらがイエズスの祈りのうちにはっきりと表わされているのです。はじめからこれらのことが祈りのテーマであったがゆえに、ナザレトのイエズスは「うまずたゆまずに」(ルカ18・1参照)いつも祈られたのです。祈りが全ての中心でした。全生涯が祈りでした。人類の歴史において、これほどまでに神への祈りに専念した人は他になかったでしょう。ナザレトのイエズス、人の子にして神の子、〈御父とともに在す御方〉がなさったほどには。

イエズスの祈り

2 福音書には「イエズスは祈られた」という明快な表現で、イエズスの祈りが強調されている箇所がいくつもあります。昼夜を問わず、あらゆる時と状況のもとで祈られました。「朝まだきにイエズスは起きて、さびしい所に行って祈られた。」(マルコ1・35)　一日の始まり(〈朝の祈り〉)ばかりでなく、昼や夕べ、とりわけ夜の間に祈られました。「おことばを聞き、病気を治してもらうためにおびただしい群衆が集まってきたが、イエズスは、寂しい所に退いて祈られた。」(ルカ5・15～16)

「群衆を去らせるとイエズスは、祈ろうとして人気のない山に登り、夕べになってもひとりでそこで過ごされた。」(マテオ14・23)

3 福音史家が強調するように、御生涯の重大な出来事に際して、イエズスはかならず祈られました。ヨルダン川での洗礼の場面では、「人々はみな洗礼を受け、イエズスも洗礼を受けられたが、そのとき祈られると、天は開け……」神の声が聞こえました。(ルカ3・21)　また御変容の山で天の声が響き渡ったのも、同じく祈っておられる時でした。「イエズスはペトロ、ヤコボ、ヨハネを連れて、祈ろうと山に登られた。祈るうちに、み顔の様子が変わり…」(ルカ9・28～29)ました。

4 祈りはまた、重大な決定にあたっての、そして救い主キリ

説教・講話・書簡等の抄訳

ストの使命にとって意義深い各瞬間を迎えるための、準備段階でもありました。教えを宣べ始めるときには、断食し祈るために荒野へ退かれました。(マテオ4・1～11参照)　また弟子を選ぶときにも祈られました。「イエズスは祈ろうと山に登り、夜じゅう神に祈られた。夜明けになると弟子たちを呼び、その中から十二人を選んで使徒と名づけられた。」(ルカ6・12～13)　フィリッポ・カイザリアの近くでのペトロの信仰告白のときも同じです。「イエズスは人里離れた所で祈られた。そばに弟子たちもいたので『人々は私のことをだれだと言っているか』と問われた。『洗者ヨハネとか、エリアとか、昔の預言者の一人がよみがえったとか言っています』と答えると『あなたたちは私をだれだと思うか』と問われた。するとペトロは『神のキリストです』と答えた。」(ルカ9・18～20)

ラザロが復活する前の祈りには深い感銘をうけます。「イエズスは目を上げて話された。『父よ、私の願いを聞き入れてくださったことを感謝いたします。私はあなたが常に私の願いを聞き入れてくださることをよく知っています。私がこう言いますのは、この回りにいる人々のためで、あなたが私を遣わされたことをこの人たちに信じさせるためであります。』」(ヨハネ11・41～42)

最後の晩餐での祈り(いわゆる〈司祭の祈り〉)についても触れるべきでしょう。「イエズスは…天を仰いで言われた、『父よ、時が来ました。あなたの子に光栄を与えたまえ、子があなたに光栄を帰するように。そして、あなたが子に授けられた万民を治める力によって、子に与えられたすべての人に永遠の命を与えたもうように。』」(ヨハネ17・1～2)　イエズスは、本来の目的である神の栄光と人類の救いのために祈られたあと、続けて言われました。「永遠の命とは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエズス・キリストを知ることであります。私はあなたがさせようと思召した業を成し遂げ、この世にあなたの光栄を現わしました。父よ、この世が存在するより先に、私があなたのみもとで有していたその光栄をもって、いま私に光栄を現わしてください。」(ヨハネ17・3～5)

神は御子のうちに御自分を示される

祈りながら、御子は御父に向かってこの世での使命について報告しているかのようです。「私に賜うためにあなたがこの世から取り去られた人々に、私は御名を現わしました。その人たちはあなたのものであったのに、あなたは私に賜い、そして彼らはあなたのみことばを守りました。いまや彼らは、あなたが私に与えたものがみな、あなたから出ていることを知っています。」(ヨハネ17・6～7)「彼らのために私は祈ります。この祈りはこの世のためではなく、あなたが与えたもうた人人のためであります。彼らはあなたのものだからです。」(ヨハネ17・9)彼らとは、キリストの御言葉を〈受け入れた〉人々、御父がキリストをお遣わしになったことを〈信じた〉人人のことです。イエズスが特にこのような人々のために祈られたのは、「彼らがこの世にいて、イエズスが御父のみもとに行かれる」(ヨハネ17・11参照)からでした。「彼らが一つでありますように」、「そのうちの一人も滅びることがありませんように」(ここで主は〈滅びの子〉について言及されましたが)、「彼ら自身に、私のもつ完全な喜びをもたせるために」(ヨハネ17・13)祈られたのです。イエズスが去ったあと、この世に残り、主と同様「この世のものではない」という理由から敵意にさらされるであろう弟子たちのために、お祈りになりました。「私は彼らをこの世から取り去ってくださいと言うのではなく、悪から守ってくださいと願います。」(ヨハネ17・15)

高間での祈りの中で、イエズスは弟子たちのために願われました。「彼らを真理において聖別してください。あなたのみことばは真理であります。あなたが私をこの世に送られたように、私も彼らを世に送ります。そして私は彼らを真理によって聖別するために、彼らのために自らいけにえにのぼります。」(ヨハネ17・17～19)　引き続き同じ祈りの中で、弟子たちのあとに続く人人が一つになるようにと祈られました。「あなたが私を遣わし、私を愛されるように、彼らをも愛しておいでになることを、この世に知らせるため」(ヨハネ17・23)に。最後に、御父の栄光と人類の救いへの願いを繰り返し強調しつつ、御父が〈お与えになった〉人々すべてのために祈られました。「父よ、あなたの与えたもうた人々が、私のいる所に、私とともにいることを望みます。それは、あなたが私に与えたもうた光栄を、彼らに見せるためであります。あなたは世の始まるよりも前に、私を愛したまいました。」(ヨハネ17・24)

イエズスの〈司祭の祈り〉は、御子のうちに御自分を示された神の啓示の集大成です。これが福音の核心です。御子は、御父との間の一致の名のもとに御父に向かって話されました。(『父よ、あなたが私の中にましまし、私があなたの中にあるように。』ヨハネ17・21)　同時に、救いの実りが人々のうちに豊かにあるようにとも祈られました。そのために御子はこの世に来られたのですから。こうしてイエズスは、救いの使命を担った教会の秘義を明らかにし、〈この世〉における教会の将来の発展のために祈られました。イエズスは光栄を現わしてくださいました。イエズスの御言葉を受け入れるすべての人が、イエズスとともにその光栄にあずかるのです。

最後の晩餐の祈りでは、イエズスは御父と一体である御子として祈られましたが、そのすぐあとのゲッセマニの祈りでは、人の子としての面が目につきます。「私の魂は死なんばかりに悲しむ。あなたたちはここにいて、目を覚まして待て」(マルコ14・34)と、オリーブの園で弟子たちに仰せになりました。一人になると、地にひれ伏して祈られました。どんなに深く苦しまれたか、お祈りの言葉からわかります。「アッバ、父よ、あなたには何でもおできになります。この杯を私より遠ざけてください。とは言え私の思いのままではなく、あなたのみ旨のままに。」(マルコ14・36)

ヘブライ人への手紙が、このゲッセマニでの祈りについて触れています。「キリストは地上での生活の間、大声の叫びと涙をもって、ご自分を死から救うことのできるお方に祈りと祈願をささげ、その敬虔があったから聞き入れられた。」(ヘブライ5・7)　ゲッセマニの祈りは聞き入れられました。苦しみと向き合った人間の真実の姿とともに、世を贖おうとする聖旨においてイエズスと御父は一つに結ばれていることが、この祈りからわかります。贖いこそはキリストの救いの使命の源なのです。

イエズスは他にも、イスラエルの法や宗教的伝統の定めるところに従って、多くの祈りをおささげになりました。12歳の時には両親と一緒にエルサレムの神殿に上られましたし(ルカ2・41参照)、また「いつものように安息日に会堂に入り」(ルカ4・16参照)とも記されています。しかし、福音書の伝える、宗教的義務を離れた個人としてのキリストの祈りは、実に大切なものです。教会はそれを決して忘れず、キリストと御父との間に交された親密な対話の中に、教会の祈りの源泉とインスピレーションと力を見出します。祈るイエズスの姿のうちにこそ、〈御父のために〉生き、御父と親しく一致した御子の秘義が、最も人間的な形で示されているのです。

今月のおすすめ
信徒ロ神学と霊性(定価四〇〇円　〒二〇〇円)
デル・ポルティーリョ著　新田壮一郎訳
祈りと神の現存(定価九〇〇円　〒二〇〇円)
ルナ・イ・ルカ・デ・テナ著　大島・平井・新田共訳

不変の教え

「関心は持て、しかし心配しすぎるな」

1 「まず神の国……を求めよ。」(マテオ6・33)

山上の説教の中でナザレトのイエズスは当時の人々に語られましたが、同時にすべての世代の人々に向かっても語られたのです。とくに今日は私たちに対してもお話になり、キリストのこの御言葉が本日の典礼の一部となっています。

まず神の国を求めなければならない、とはどういうことなのでしょう。主がお教えになり、私たちが毎日唱えている「御名が聖とせられますように、御国が来ますように、御旨が行なわれますように」という祈りに従って生きなければならないということです。

神がまず私たちの生活の中におられなければならない。神に基盤をおく道徳が私たちの存在を司らなければならない。神の聖なる御旨がすべてに先行しなければならない。そうしてこそ、私たちの生活の内なる統一も同時に実現するのです。

2 人は二人の主人に仕えることはできない、とキリストは教えておいでになります。「神とマンモンとに共に仕えることはできぬ。」(マテオ6・24参照)「あなたは私のほかに、なにものをも神としてはならない」(出エジプト20・3)と、かつて神はモーゼの口を通して語られました。

他の神とは、イエズスが言われたマンモンのような偶像のことです。イスラエル周辺の異教徒たちが人間の弱さや欲望に似せて〈神々〉を作り出していたので、このようにお命じになったのです。

今日ではこれらの〈偶像〉、偽りの神々は異なった形をとっています。実にマンモンは偶像崇拝の象徴となり、そのために人々は、現世的ではかないものを唯一の究極的な目的と見なしています。〈世界〉、特に人間の作り出したものから成る複雑な世界が、ある意味で人間にとって神となってしまっています。

いわば世俗主義がこの世を神と見なしているのです。神は存在せず、この世と世のすべてのもの、すべての富と資源の創造者は神ではないかのように、人々は生活しています。しかし私たちの信仰によれば、人間の英知や才能が作り上げたこの世のすべてのものは、創造という神のわざの中で明確な源と原理を有しているのです。

現代の世俗主義

3 ですからキリストの戒めは、今の時代に典型的な世俗主義の様々な形態に対してなされていると言えます。今日の私たちに向かってイエズスは仰せになるのです。「人は二人の主人に仕えるわけにはいかぬ。一人を憎んでもう一人を愛するか、一人に従ってもう一人をうとんずるかである。」(マテオ6・24)

一人の人間を分つことはできません。人ははっきりした価値体系に導かれて生きなければならず、「まず」神の国とその正義を求めなければならないのです。(マテオ6・33参照)そうでなければ人の心の内なる秩序は脅かされてしまいます。

すべての道徳の秩序は、その基盤を堅固な現実の上に築かなければなりません。すなわち、万物の創造者たる神の第一の地位を認識するという客観的な真実の上に築かれなければならないのです。神の地位が否定され、人が人間の領分において神から離れ、自治を主張する所においては、権利と義務の重要な基盤が否定され、人は様々な価値に反抗し、結果として自分自身に害を与えるはめになってしまいます。「まず」神と神の国と、その正義を求める人のみが「真実」に、すなわち公正で、すべての人に最大の善を保証するものに則した生き方をするようになるのです。

万一、人が心の中で〈別の神々〉、古代および現代の偶像を優先させるならば、神を「うとんずる」か「憎む」という真の危険に陥ります。創世紀の最初から人間の歴史の中にこの危険は存在し、様々な形で絶えず姿を現わします。ですからキリストの言葉はいつの時代にもあてはまるのです。

4 本日の典礼はこの危険について語ると同時に、使徒聖パウロの異教徒に対する言葉と共に、裁きが神のものであることを示しています。主が来られて、「闇に隠れたものを照らし、心の企てを現わされる」というわけです。(コリント①4・5)そして最後に、人でもなく自分の良心でもなく、主こそが裁きを下すのである、と使徒は宣言しています。(コリント①4・3〜4参照)

そこで、真実の名において――創造についての第一の根本的な真実のみならず、神の裁きという究極の真実の名において――世界と永遠を司る神の統治に関連したすべての正義を何よりもまず求めましょう。

5 本日の典礼は聖書全体、特に福音書と同じように、畏怖を起こさせる言葉というより、神への信頼の言葉をもって語りかけようとしています。これは神についての完全な真実、神の偽らざる真実から見て、そうせざるを得ないのです。イザヤがはっきりと述べていることであり、答唱詩篇全体においても語られていることですが、特に本日の福音書のイエズスの言葉の中に明白に表われています。

「空の鳥を見よ。まきも、刈りも、倉に納めもせぬに、天の父はそれを養われる。あなたたちは鳥よりもはるかに優れたものではないか。(…)野のゆりがどうして育つかを見よ。」(マテオ6・26〜28)

イエズスは私たちに、神と神の摂理を信頼せよとお教えになります。このような信頼により、人の魂の内に神が〈第一の場〉を占めることになり、天にいます父なる神のみが、人が全霊を傾けて仕えるべき唯一の主であることを示すのです。

6 この信頼が人の心を司るようになれば、世俗的な事柄にはどの程度気を使うべきかがわかってきます。確かにキリストは「関心をもつな」ではなく「心配するな」と仰せになりました。正しい価値の尺度を失うほど悩まないように、ということなのです。神を忘れるほどに悩んではなりません。神が存在しないかのような生き方をしてはなりません。

事実、神は初めから人をこの世の事柄に携わるよう定められました。人がその能力に応じて作り上げたものは、神の目から見て独自の価値があります。ただ、それらが人間の正しい見通し、完全な真実に対する感覚を見失わせるものであってはなりません。〈この世〉が人の目の前から、神の国とその正義をおおい隠してはならないのです。

――お知らせとご案内――

■ 当協会は、エスクリバー神父のニュース・レター配布を受託しております。ご希望の方は、係までお申し込みください。
〒659　芦屋市船戸町12−6
(財)精道教育促進協会
ニュース・レター係

■ 「教皇様の声」年間予約講読のお申し込みも受付中です。

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部七十円送料四十円　■一年予約八〇〇円送料五〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393